

愛知 図書館協会々報

特集 観光と図書館

観光分野における図書館の役割に注目が集まっている。地域の情報拠点として、誰でも気軽に利用できる図書館は、まちづくりの中核施設として整備される例が増えているが、観光においても大きな貢献をする可能性を秘めている。

愛知図書館協会では、令和元年度の図書館振興事業として、愛知県図書館との共催により11月10日（日）に講演会を開催した。観光分野の専門図書館である公益財団法人日本交通公社「旅の図書館」から副館長の大隅一志氏を講師としてお招きし、「とっておきの旅をするための図書館活用術」と題し御講演いただいた。

今回は、その講演会の内容を紹介するとともに、愛知県図書館における近年の取り組みと、愛知県図書館と連携して展示等を行った図書館のうち、蒲郡市立図書館の取り組みについて両館の寄稿により紹介する。

■令和元年度愛知図書館協会図書館振興事業

講演会「とっておきの旅をするための図書館活用術」

「旅の図書館」は、東京南青山にある旅・観光分野の専門図書館で、公益財団法人日本交通公社が運営している。1978年に「観光文化資料館」として開設され、2016年の移転を機に、「観光の研究や実務に役立つ図書館」をコンセプトとしてリニューアルオープンした。

大隅副館長の講演では、「旅の図書館」の沿革や業務内容の紹介から始め、「旅行」と「観光」の違い、旅の歴史や「人はなぜ旅をするのか」について、そして「図書館で旅をする」、「図書館から旅をする」、「図書館を訪ねる旅」などの興味深い内容が語られた。講演会は一般に公開して行われたが、アンケートでは「今回の講演会で図書館のイメージが変わった」との感想が寄せられるなど、図書館の新たな可能性を示すことができたのではないかと考える。



あわせて、旅の図書館と愛知県図書館の連携事業として10月11日～12月11日に県図書館1階Yotteko（ヨッテコ）において、「旅の図書館が薦める「一度は読みたい観光研究書＆実務書100冊」」や、「旅心を誘う、旅の本のレジェンド30選」の展示が行われた。

「行ってらっしゃい」と「ようこそ」と

愛知県図書館 新海弘之

■「出発地」としての図書館

「観光(旅)と図書館」を語る場合、「図書館」の基調は「目的地」にある、あるいは「目的地」としての「図書館」であることがほとんどである。

とはいえ、「旅」は「目的地」だけで成立するものではない。当たり前だが「出発地」が存在する。愛知県図書館の「観光情報」の提供は「出発地」としての機能をその基調としている。

■東三河振興と愛知県図書館

2019年10月1日現在の愛知県の人口は7,552,873人で、前年に比べ、13,688人増加している。社会増が自然減を上回った結果であり、まだしばらくはこうした傾向が続きそうである。しかし、地域別にみると、尾張地域、西三河地域は増加したが、東三河地域は減少している。早晩、愛知県全体においても人口減少局面を迎えることになるが、その意味で東三河地域は「先進」地域であり、愛知県が東三河振興を重要施策として取り組んでいる所以であって、当該地区での実践はいずれ県内各地で取り入れられていく。

こうした動きを受けて愛知県図書館では2018年3月Yottekoの一角に東三河コーナーを設置し、東三河県庁、東三河8市町村、地域の観光協会等と連携して、東三河の観光情報等の名古屋地区における発信拠点としての機能整備を進めてきた。

■観光情報コーナー

2018年11月からは東三河コーナーに加えて同じYottekoに県内54市町村、地域観光協会等と連携し、全市町村の観光関係の最新のパンフレットや地域情報誌（フリーペーパーを含む）、イベントチラシなど旬の情報を自由にお持ちいただける観光情報コーナーを設置した。こうした紙媒体による観光情報の提供に加えて、星座の模擬観察会などの関連イベントも実施している。こうした図書館独自の観光情報の発信として特徴的なものが次に紹介する「二度目の旅は図書館から」である。



観光情報コーナー

■「行ってらっしゃい」と「ようこそ」を結び ー「二度目の旅は図書館から」という取り組みー

観光情報コーナーの整備に合わせて、愛知県図書館では2017年から「二度目の旅は図書館からー図書館からはじめるちょっとディープなまちあるきー」という企画をスタートさせた。

愛知県図書館と地元の図書館が連携して、所蔵する本や各種情報を使って地域の魅力の発信、まち歩きの新しい提案を行い、近場である県内の観光地を再認識してもらい、将来的にはリピーターになってもらえるようなイベントとし、当該自治体の観光情報の提供、関連イベント情報の提供等を通じて、各図書館の利用者増と当該地域の活性化につなげるとともに、地元館での同展示も計画する。「旅行者にもう一回その土地に来てもらおう、そしてその時は図書館から旅を始めてもらおう」という趣旨を込めたものである。

第1回は2018年2月に豊橋市図書館、田原市図書館の協力で「魅力対決！豊橋VS田原in 県図書」。

第2回は2019年1月～2月に蒲郡市立図書館の協力で「蒲郡ー海辺のまちの戦国時代ー」。



「蒲郡ー海辺のまちの戦国時代ー」展示風景

第3回は2019年12月～2020年2月に名古屋市図書館、津島市立図書館、愛西市中央図書館の協力で「もう一つの東海道ー佐屋路を歩くー」を開催した。

第1回は2016年度に豊橋市、田原市の図書館で開催された企画を愛知県図書館に舞台を移して実施したものであり、第2回は2019年8月に蒲郡市立図書館で同じ資料を使った企画を実施、第3回は協力3市の図書館での巡回展示を計画している。

会場こそ愛知県図書館ではあるが、展示資料はすべて協力館の作成であり（愛知県図書館は印刷だけ）、関連のトークイベントも協力館の司書職員の講演で構成した。

旅の図書館の大隅一志副館長は「コラム愛知県図書館「二度目の旅は図書館から」（『観光文化』243号）のなかで「県立図書館と市町村立図書館がそれぞれの役割をふまえながら連携する双方向の取り組みは、今後、地域が観光魅力の発信や観光需要の掘り起こしを図る上で、新たな可能性を秘めているように思われる。」と評してくれた。

■地域資料活用における「観光」という視点

「二度目の旅は図書館から」の愛知県図書館からのメッセージに「旅から帰った後も、なにか気になる“まち”ってありませんか。そんな“なにか”を探す旅「二度目の旅」を図書館から始めてみませんか。図書館にはその“まち”の物語が詰まっています。」と書いた。

今の旅は単なる観光地巡りから旅人が自分のテーマに合わせてそのまちの「物語」に積極的に参加するものに変ってきている。観光の定義は大きく広がってきており、現地の視点でいうところの「関係人口」の拡大へつながっている。こうした新しい形の旅人の存在を認識し、「目的地」にきた人に地域情報を伝える

だけでなく、まだ「出発地」にいる人へその町の魅力をどうやって伝えるかという視点でもう一度地域を見直し、地域資料の「活用」を考えることは、地域の魅力とともにその地域の課題をも再発見するための重要な契機となる。地域おこしのキーパーソンとしてよく言われる「よそ者、若者、ばか者」のうち、ばか者はともかく「よそ者」「若者」の視点は「新しい旅人」の視点と近いものがある。そしてその視点の先にはお題目ではない「地域の課題解決—換言すれば地域のサステナビリティの確立—」の取り組みに向けたメルクマールを見出しうのではないか。

以上が愛知県図書館が考える「観光（旅）と図書館」という「問い」に対する愛知県という条件下—現時点—における「特殊解」である。

愛知県図書館は「観光（旅）」の「行ってらっしゃい」を担い、地元の図書館は「ようこそ」を担う。「観光（旅）」の「出発地」と「目的地」とを結ぶ「県立図書館と市町村立図書館がそれぞれの役割をふまえながら連携する双方向の取り組み」である。

海辺のまちの図書館から

蒲郡市立図書館 三浦佳穂

■愛知県図書館との連携企画

「二度目の旅は図書館から」について

愛知県図書館からの依頼を受け、内容をどんなものにするかを悩んだ。「二度目の旅」と銘打ってあるからには、ありきたりの観光コースではなく、図書館を中心とした知る人ぞ知る、という内容にしたかった。

そこで蒲郡市博物館の学芸員に相談をし、蒲郡の戦国時代を取り上げようということになった。博物館の発行した「戦国時代マップ」は街歩きと史跡見学を組み合わせた内容になっており、今回の展示にうってつけの題材だった。「戦国時代マップ」で解説されている、松平氏、鶴殿氏という二大氏族を取り上げ、紹介することで蒲郡の戦国時代を語る事ができると考えた。

「二度目の旅」とはいえ、蒲郡をよく知らない方も多だろうと、パネルの2枚を使って蒲郡市について簡単に紹介。その後、戦国時代マップを掲載し、蒲郡の戦国武将たちを解説した。

パネルを作成するにあたり、『蒲郡市史 本文編』1巻～4巻を参考文献とし、この記述にしたがった。

記載されていた事項で、分かりにくいところなどは学芸員と相談し、写真や図なども博物館から提供を受け、パネルに掲載することができた。



蒲郡市立図書館での「海辺のまちの戦国時代」展示

こうして愛知県図書館で2019年1月～2月に展示「蒲郡—海辺のまちの戦国時代—」が開催され、期間中のトークイベント「『蒲郡市史』で読み解く戦国時代」には、私も講師として参加した。同時に蒲郡市立図書館でも特設コーナーを作り関連資料を置いたところ多くの反響があった。反響が大きかったため、8月に特別企画として、「蒲郡の戦国時代」と題し、愛知県図書館で使用したパネルの展示と、学芸員とのコラボトークショーも行った。トークショーにも多くの来場者があり、改めて、市民の関心の高さを知った。



蒲郡市博物館で学芸員とコラボトークショー

今回の展示で参考図書として使用した『蒲郡市史 本文編』や「戦国時代マップ」は、郷土の歴史を知ろうとした時、初めに触れてほしい資料だ。

歴史に関心のある人たちだけでなく、地域の子供たちにも、自分の住んでいる市町にどんな歴史が眠っているか関心を持ってもらいたい。この展示はそのきっかけを作るいい機会だったのではないかと思う。

愛知県図書館、蒲郡市立図書館と2カ所で展示することとなったこの企画で、一人でも多くの方に新しい本との出会いがあれば幸いである。

■蒲郡市立図書館の観光への取組み

1 観光商工課との協力企画

「蒲郡の観光展」を蒲郡市立図書館展示コーナーにて開催。秋の観光・行楽シーズンを前に、市民に広く観光の街蒲郡をアピールし、近隣地域の観光情報も発信した。蒲郡を中心に県内や交流のある地域の観光パンフレット、イベントチラシ、ポスター等の展示、配布を行った（2017年まで毎年秋に開催）。

2 蒲郡観光交流おもてなしコンシェルジュ検定へのチャレンジ

認定されたコンシェルジュが、来訪者の方に様々なおもてなしを提供することで、蒲郡を素晴らしい観光交流都市に育てていくことを目指すという、蒲郡市観光協会主催の取組に、パートを含む職員全員が参加。全員が認定を受けた。

3 蒲郡クラシックホテルの歴史を探る会への参加

昭和初期に建設され、文豪などが愛した「常磐館」「蒲郡ホテル」の歴史を掘り起こそうと、蒲郡クラシックホテルが主催となり発足した「歴史を探る会」に参加。常磐館、蒲郡ホテル、蒲郡プリンスホテルと受け継がれた中で宿泊した著名人や提供されたメニューなどの資料をまとめ、関連資料などの情報を収集する。

4 蒲郡市生命の海科学館主催イベントに参加

科学館と図書館で共通のテーマを設定し、企画展、ワークショップ、展示解説等で連携している。これまで「江戸の科学者・くにともいっかんさい国友一貫齋」（2019年2月）、「月面着陸50年」（2019年9月）について取り上げ、テーマに関連した書籍を紹介、科学への興味を育てる活動を目指している。

5 海辺の文学記念館にて絵手紙の展示

かつて蒲郡市立図書館を事務局として全国公募の「がまごおり絵手紙大賞」が開催されていた。その応募作品を海辺の文学記念館にて展示している。

蒲郡市立図書館ではこういった地域の情報を収集・発信することで、まちづくりの一端を担っている。さまざまな市民参加型の企画を行うことで、郷土愛が育まれていくことを願う。

研修紹介

PICKUP

選書研修

2019/12/6



令和元年度の拡大講座は、以前からアンケートなどで要望の多かった「選書」をテーマに行った。受講者は90名と多く、また、研修内容を有意義なものとするため、事前に受講者に選書業務で困っていることや講師への質問を提出していただくこととしたところ、非常に多くの問題点・質問が寄せられ、関心の高さが裏付けられた。

研修では、まず椋山女学園大学の山本昭和教授に、「選択理論の基礎知識」と題し、図書館の選書を行う上での原則について講演をいただいた。「図書館員であれば忘れてはいけない心構え」について話すと前置きされ、市民にかわって本を選ぶ、あらゆる資料要求にこたえる、結果として利用が増えてくる、という内容について、公共図書館に長く勤務された経験も踏まえて解説し、「検閲ではなく選択を」と問いかけた。除籍の基準についても述べられた。

アンケートでは、「選書の根本について考えるよい機会になった」、「司書の初心にかえることができた」等、選書の基本的な考えが学べてよかったという回答が多く寄せられた。

続いて、犬山市立図書館の小曾川真貴氏により、「図書館にラノベを求めるのは間違っているだろうか」のタイトルで事例発表が行われた。ライトノベルに関する豊富な知識をもとに、ラノベの様々な類型や、犬山市での選書、コーナーの運用状況について報告する、非常に興味深い内容であった。

研修の最後には情報交換をする時間を設けた。受講者が館種などによりグループに分かれ、選書やリクエストの基準や対応で困っていることについて話し合ったが、「他館の事例を聞くことができ参考になった」、「悩みを共有できた」等とても好評であり、今後も研修にできる限りそのような時間を設けたいと考えている。

会員館最近の話題から

名古屋市南図書館「伊勢湾台風資料室だより」の発行について

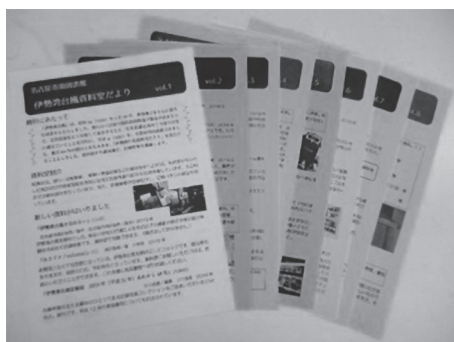
名古屋市南図書館 阪口泰子

令和元年(2019年)は、「伊勢湾台風」被災60年の節目の年であった。被害甚大であった伊勢湾岸地域では、国・県市町村・ライフライン管理者等を中心に「伊勢湾台風60年連絡会」が発足、各種事業を展開し、マスコミや防災関係団体・企業、市民による周年事業も多数行われた。平成4年(1992年)に開設された当資料室においても、写真パネルを中心とした資料貸出、レファレンス、シンポジウムへの参加、デジタルデータ作成等、例年をはるかに超える慌ただしい動きがあった。その一方で、開室後四半世紀を経、資料室の知名度が低下し、60年を契機に初めてその存在を知った、という声が多いことに、改めて気づかされた。そこで、この機会にあえて基本に立ち帰り、60年の動きと合わせ資料室の活動を伝える「資料室だより」を創刊した。

資料室情報コーナーと南区役所に紙媒体を配布、データを名古屋市図書館HPに掲載、県内図書館にメール配信しているほか、全国規模の「災害アーカイブメーリングリスト」でも情報提供している。

6月に発行したvol.1では、伊勢湾台風から話が始まる浦沢直樹「あさドラ!」を新着資料として紹介した。意外と知られておらず、これを機会に購入したという嬉しい反響もあった。以後毎回、新着資料の紹介、既蔵資料の解説、レファレンス事例、関連施設紹介、展示・イベント情報など、基本情報と旬の話題を織り交ぜて紹介、現在vol.8まで発行している。

周年が終了しても、資料室の役割は粛々と続く。今後も南区・名古屋市に留まらず広く資料と情報の収集に努め、紙上で紹介していく所存である。是非ご活用いただくとともに、情報をお寄せいただければ幸いです。



田原市図書館 第5回図書館レファレンス大賞受賞について

田原市中央図書館 河合美奈子

2019年11月、田原市図書館の「行政・議会支援サービス」の取り組みが、第5回図書館レファレンス大賞の文部科学大臣賞を受賞した。このサービスは、レファレンスや貸出など、既にあった図書館の手法をいくつか組み合わせ、2012年4月に「行政支援サービス」として始まった。2015年度に議会支援が、2018年度に学校教育支援が加わり、2017年度には「行政・議会支援サービス」に名称を改めた。

現在は、行政職員、議会事務局職員、議員、市内小中学校教員、学校司書を対象に、「レファレンス(調査の援助)」、「資料の複写」、「資料の貸出」、「政策・イベントのPR展示」、「学校教育支援(調査の援助)」の5種類のサービスを展開している。申込書の受付から回答まで、主に参考郷土チームの5名が担当する。

レファレンスでは、企画立案等、業務に関する調査の援助を行う。担当で調査ツールを分担したり、調査中や調査済みの資料・テーマを回答様式1枚で共有したりと、効率よく進める工夫をしている。具体的には、郷土の歴史や新聞記事、先進事例、議会視察先の情報、授業テーマに関する依頼が多い。展示では、市の事業やイベント、パブリックコメントの意見募集のPRに関する依頼が多く、写真やパネル、グッズなどを担当部署から借り受け、資料と一緒に並べるなど見せ方を工夫している。

議会支援では、議会の特性やニーズを踏まえ、「議会図書室の整備への協力」や「定例会にあわせた団体貸出」など、独自の支援も行っている。

学校教育支援では、レファレンスのみを行い、回答や参考資料は、図書館以外に学校、移動図書館、学校司書経由でも受け取ることができる。

「行政・議会支援サービス」は、まちの課題を身近なものにしてくれる。これをきっかけに、行政・議会の場で質の高い議論が行われ、市民がまちの課題と向き合う機会が増え、地域の課題解決の促進につながれば幸いです。今後も利用者のニーズに対応しながら、このサービスで元気なまちづくりを支えていきたい。

「とよはしアーカイブ」の公開と活用

豊橋市図書館 岩瀬彰利

豊橋市図書館では、令和元年6月から図書館HPの「とよはしアーカイブ」にてデジタル化資料を公開している。公開資料は、(公財)図書館振興財団の助成を受けてデジタル化した当館所蔵の郷土資料であり、市指定文化財の吉田城図4点をはじめ、郷土和装本、市街図、土地宝典、戦争関連資料など9つのコンテンツの1,008件である。

「とよはしアーカイブ」の特徴の一つに、吉田城絵図・戦前地図とグーグルマップの重ね合わせができる機能がある。アプリを使わずにスマートフォン等の位置情報から、自分が城下町や焼失前の街のどの地点にいるのかわかるので、街歩きに活用できる。



タブレット、スマートフォンを使った街歩きイベント

また、今年度は公開を記念して「デジタル化した和装本・絵図・地図展」や井沢元彦氏、安田文吉氏の講演会、文化財指定に向けた「近代図書館の先駆けー羽田八幡宮文庫」シンポジウム等を開催して「とよはしアーカイブ」の周知に務めた。広報活動等の成果により、公開から12月末までで14万アクセスがあり、公開資料は出版物や学生の卒論等にも使われている。

なお、シンポジウム終了後の8月には、羽田八幡宮所蔵の織田信長、豊臣秀吉などの書翰5点、後奈良天皇などの宸翰3点、計8点が羽田八幡宮文庫の旧蔵資料であることを確認した。これら資料は今まで地元で知られていなかったもので、今後は「とよはしアーカイブ」で公開したいと考えている。



文庫旧蔵資料と確認された織田信長書翰

芸術講座「愛知芸大生とブックディレクター 幅允孝が考える新しい県図書と公共図書館の姿」の開催

愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館 石野友恵

愛知県立芸術大学(以下本学)は、愛知県図書館(以下県図書館)協力のもと、2020年2月7日(金)県図書館において、芸術講座を開催した。ブックディレクターとして様々な場所で本と人をつなぐ仕事をされている幅允孝氏は、本学で非常勤講師をお務めになっている。今回、その幅氏と本学デザイン専攻学生が、県図書館を題材として図書館について考え、それを一般向け講座として発表した。

講座では、まず幅氏が読書や図書館をめぐる状況、自身の新しい試みなどを紹介。その後、3名の学生が「県図書館をよりよくするアイデア」を発表した。

県図書館1階ロビーは、2018年3月に本学デザイン専攻協力のもと「Yotteko(ヨッテコ)」という、親しみやすく開かれた空間に改修された。そのYottekoの要素を館全体に浸透させ、統一感のある明るい館にする案が、学生により提案された。表紙を見せて展示された本の方が手に取りやすいことに着目した学生は、図書館上部の空間を活用して多くの本を見せることができるツリー型の展示架を提案。また、児童室を子どもだけで楽しく過ごせる秘密基地のようにするアイデアや、読書の楽しさを視覚化する試みとして、読んだ本のジャンルによって変わっていく虫を育てる「本の虫キャンペーン」などが語られた。

本と人との距離が離れつつある現在、それを打開する若いアイデアに、多くの来場者が聞き入り、図書館の未来に思いをはせる素晴らしい時間となった。



幅氏(左)と愛知県立芸術大学の学生たち

「日本図書館協会東海地区会員のつどい」 これまでとこれから

愛知県図書館 新海弘之

「日本図書館協会東海地区会員のつどい」は愛知、岐阜、三重3県の選出の代議員や会員有志からなる「日図協東海地区会員のつどい実行委員会」が主催し、日本図書館協会と愛知図書館協会の共催、岐阜県図書館協会と三重県図書館協会の後援により、2007年から始まり、2018年までで12回開催した。

この「つどい」は東海地区の図書館関係者と日本図書館協会との接点としての役割を基調としつつ、その時々の図書館に関するトピックやこの地方の図書館の取り組みの紹介等を中心とし、また日本図書館協会から役員の方に来ていただいて日本図書館協会の近況報告などを加える形で構成してきている。

最近のテーマは、第10回「これからの図書館をかたろう」とし、全ての報告を図書館に対する「外から目線」で組み立てることで、これから図書館のあり方を複眼的にとらえる試みとした。第11回「地方で司書の腕を磨く」とし、地方で働く図書館員の自己研鑽についての報告を通じ、地方の図書館員にとって「日本図書館協会とは何か」を考えた。第12回は一般公益法人となつてから最初の代議員改選のタイミングに合わせて「これからの日本図書館協会について考える」とし、地方の図書館員にとって日本図書館協会は何をしてきたか、今後どうあるべきか、について考えることとした。今後もしほらくは地方の図書館員への日本図書館協会の取り組みを構成の中心に置きたい。

「東海地区会員のつどい」の今後の課題は多岐にわたるが、大きくまとめれば以下ようになる。

- 1 実行委員会のメンバーの世代交代。
 - 2 実行委員会形式の是非。
 - 3 若い図書館員にとって魅力のあるつどいのあり方。
 - 4 つどいのテーマ募集の方法。
 - 5 PRのためのツールの拡張。SNSの導入。
 - 6 日本図書館協会からの助成の強化。
 - 7 いろいろな地域の図書館団体等との連携。
- 少しずつでも改善に努め、より有意義なものとしていければと考えている。

日本図書館協会東海地区会員のつどい開催テーマ		
2007年	第1回	『これからの図書館像』と日本図書館協会の役割
2008年	第2回	様々な立場で図書館を支える人たちの「働き」を考える
2009年	第3回	地域の図書館の現状報告
2010年	第4回	図書館が支える様々な読書
2011年	第5回	地域でのJLA活動－組織、会員、研修－
2012年	第6回	東海3県の図書館から
2013年	第7回	日本図書館協会の現在
2014年	第8回	学校図書館の現状と課題を考える
2015年	第9回	東海3県の最近の話から
2016年	第10回	これからの図書館をかたろう
2017年	第11回	地方で司書の腕を磨く
2018年	第12回	これからの日本図書館協会について考える

愛知図書館協会 会勢

(令和2年2月1日現在)

施設会員		93
	公共図書館	64
	専門図書館	4
	大学図書館	22
	その他	3
個人会員		78
賛助会員		9
	計	180

事務局日誌 (平成31年3月～令和2年2月)

H31/3/5・7	統計研修 (愛知淑徳大学)
3/19	第2回理事会 (愛知県図書館 以下県図)
4/18	平成30年度会計監査 (県図)
R1/ 5/15	令和元年度総会・第1回理事会 (県図)
6/20	第1回研修委員会 (県図)
6/27	児童サービス研修①・拡大講座 (県図)
7/12	児童サービス研修② (県図)
8/23	第56回愛知県学校図書館研究大会 (名古屋学院大学名古屋キャンパスしほり：上田副会長出席)
9/11	児童サービス研修③ (県図)
10/3	レファレンスサービス研修① (県図)
10/24	児童サービス研修④ (名古屋市鶴舞中央図書館)
11/1	レファレンスサービス研修② (県図)
11/21・22	全国図書館大会三重大会 (共催) (三重県総合文化センター)
11/27	レファレンスサービス研修③ (県図)
12/6	選書研修 (県図)
12/11	児童サービス研修ステップアップ・紙芝居 (県図)
R2/ 1/29・30	資料保存研修 (県図)
2/18	第2回研修委員会 (県図)

新館自己紹介

東海市立横須賀図書館

平成31年1月4日開館

当館は、市民の生涯学習環境の充実を図るために整備された複合施設「まなぶん横須賀」の1階・4階に、東海市立中央図書館の分館として、平成31年1月に開館した。「本のある広場」「市民の書斎」として、市民に広く親しまれる図書館を目指している。



まなぶん横須賀 外観

■地域に愛される図書館

名鉄尾張横須賀駅、市循環バス停留所に隣接しており、学校・仕事帰りにも気軽に寄って読書を楽しむことができる環境づくりに努めている。健康的でアクティブな生活を支援する「いきいき元気コーナー」など目的別のコーナーを多く設けているほか、大活字本や拡大読書器を配して幅広い世代のニーズに答えている。ブラウジングには過ごしやすい一人掛け椅子を用意し、本館と変化をつけた多様なジャンル・ラインナップの雑誌を、ゆっくり閲覧できるくつろぎのスペースとしている。

また、図書館エリア横の「街角サロン」には、自動販売機を設置しており、休憩・飲食のスペースとして賑わう。何より、ガラス張りの開放的な空間であり、あたたかな光あふれる和やかな雰囲気が、地域の方の交流の場として愛されている。



街角サロン

■多様な利用の形に応える4階

4階閲覧学習コーナーには、個人席（81席）、グループ席（29席）を設置しており、全席でWi-Fiが使用可能である。

学生を中心に多くの利用がある個人席は、閉館時間が午後9時ということもあり、好評である。グループ席は、利用するグループの人数や用途に合わせて机の移動・配置が可能であり、学生のグループ、親子などが会話を楽しみながら利用している。



閲覧学習コーナー グループ席

また同階には貸会議室として、大会議室（定員：60人）、小会議室（定員：36人）を設置し、市主催の事業をはじめ、会議や勉強会、市民団体による講座など多様な形で利用され、新たな生涯学習の場として地域に根付き始めている。



大会議室

- 所在地：〒477-0034東海市養父町北反田41番地
電話 0562-39-1222
FAX 0562-33-1555
- 開館時間：午前9時～午後9時
- 休館日：月曜日（休日にあたるときは翌平日）
年末年始、特別図書整理期間
- アクセス：名鉄 尾張横須賀駅 下車すぐ
市循環バス 尾張横須賀駅前 下車すぐ